

## 翻訳と文化

翻訳は文化にとって大切な役割を果たしている。明治以来西欧の文物を数多く翻訳して我が国の近代化が行われた事実や、古来中国の書物を輸入し翻訳して日本の伝統が形成されてきた事実を考えてみれば、そのことは誰でもすぐに理解できるだろう。ところが、こういった重要性があるにもかかわらず、翻訳そのものの地位は原典のそれに比べると著しく劣るものとされてきた。しかし、本当にそうなのであろうか。翻訳を通して文化を眺めていくと、何かが見えてくるのではないのだろうか。教養デザイン研究科主催のミニ・シンポジウム「翻訳と文化」は、そういった趣旨のもとで二〇一八年十一月十日に行われた。発表者もふくめると、六十人を超えた

翻訳と文化

人が集まり盛況であり、多くの聴衆が熱い討議に耳を傾けていた。

シンポジウムは一部と二部に分かれていた。第一部では、本研究科の虎岩直子教授、高遠弘美教授、東京大学の野崎敏教授が登壇した。アイルランド文学が専門の虎岩氏は「アイルランドと翻訳」というタイトルの発表をおこない、アイルランドとイングランドの関係を軸に植民地化における翻訳の役割を論じていった。現在『失われた時を求めて』の個人訳に取り組んでいる高遠氏は、「ブルーストを訳しながら考えたこと」という発表をおこなない、自分が翻訳をおこなうときの心構えからはじめ、具

岩野 卓司

体的にどういふふうに翻訳しているのかをいわば臨床報告した。数々の翻訳や評論を手掛ける野崎氏は、「翻訳すなわち創造」というタイトルのもとで、翻訳の営みが作家による創造行為と連続しているのではないかという問題を投げかけてくれた。

第二部では、三人の発表に基づいて討論が行われた。

私の司会のもとで、第一部で司会をした広沢教授、本研究所の井上善幸教授、丸川哲史教授がディスカッサントとして議論に参加した。ドイツ文学が専門の広沢氏は、ベンヤミンの翻訳論をとりあげながら、この翻訳論と各登壇者の翻訳についての考えのかかわりについて質問していた。英文学を研究している井上氏は、英語とフランス語で作品を発表した作家ベケットの営みをとりあげ、作家が自作を自分で翻訳した場合の創作と翻訳についての問題提起をおこなった。中国思想を研究している丸川氏は、いわゆる「翻訳論」が西欧中心の視点に立脚していることを指摘し、東アジアの日本ということから出発して的世界史的な視座の必要性を訴えていた。ディスカッサントとの質疑応答の後、会場からは、ロシア文学の研究者、ブルーストの研究者、中国現代史を研究している大学院生たちから、いろいろと興味深い質問が寄せら

れ、発表者たちは丁寧に答えていた。

シンポジウムの内容は多様で網羅的にまとめることはできないので、私の関心を引いた事柄のうちのいくつかを記しておく。

(1) 政治性・歴史性 翻訳は後進国が先進国の文物を取り入れるための手段として存在していた。明治期の日本の近代化のように国策やナショナリズムともかわり、翻訳はその意味で政治的なものである。また、虎岩氏が指摘したように、植民地における統治者が翻訳を通して被支配者を理解していった事実も存在する。丸川氏は魯迅とベンヤミンが同時代に直訳の必要性を訴えたことと世界史的意義を強調したが、ここに見られるのは翻訳の政治性と歴史性であろう。翻訳を通して政治や歴史の深層が見えてくるのではないのだろうか

(2) ベンヤミンとリズム 広沢氏はベンヤミンの翻訳論を紹介したが、この翻訳論は原文のシンタクスやリズムをそのまま翻訳のなかに取り入れるべきだというものである。例えば、フランス語の文を日本語に訳すとき、フランス語の構文のまま日本語の構文を成形してしまうということである。野崎氏が翻訳者にとっての「劇薬」と表現していたように、この翻訳論は魅惑的ではあ

るが、それに従って翻訳したら大変なものになるもので

てきた。

ある。小説家で思想家のビエール・クロソウスキーがかつてヴェルギリウスのラテン語の詩をフランス語に翻訳したものが、その好例とも言えるが、フランス語の破壊という酷評に晒されたのもまた事実である。ただ、原文のリズムに関しては、虎岩氏がカンソーによるランポアの翻訳が意味の伝達でないものを示し、井上氏もリズムの重要性を指摘していた。リズムを翻訳することには、意味を超えた言語の根源とのかかわりがあるのではないのだろうか。

(3) 翻訳の現場 高遠氏と野崎氏は翻訳をどのように実践したかを、豊富な実例を挙げながら示してくれた。高遠氏の発表は翻訳学校に通ってその手ほどきをうけているかのようにあり、特に *pioneer* という単語の意味を発見していく様は、まるで探偵が犯人を見つけるミステリー小説のようで、とてもスリリングであった。翻訳を通して自分の生活や日本語が豊かになっていくというのも、なるほどと思われた。野崎氏も翻訳と創造という主題を、作家の創作過程と翻訳者の仕事を比較しながら論じてくれたが、その際に翻訳者としての自分の体験を通して語ってくれたので、実感を持って私たちに伝わっ